



漢詩「涼州詞」教材考：  
辺塞詩をめぐる江戸人の受容を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 『札幌国語教育研究』編集委員会 公開日: 2025-03-26 キーワード: 作成者: 樋口, 敦士 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/0002000468">https://doi.org/10.32150/0002000468</a>

## 漢詩「涼州詞」教材考―辺塞詩をめぐる江戸人の受容を中心に―

樋口 敦士

### 一 はじめに

漢詩「涼州詞」は多くの高等学校の国語教科書に所収される定番漢詩教材である。現行の「言語文化」教科書における当該詩の採録状況は筑摩書房一冊、東京書籍二冊、大修館書店一冊、数研出版三冊、明治書院一冊、桐原書店一冊、計六社九冊に採録されている。その内容から西域に出征した兵士が自身の戦死を想定しながら、刹那の楽しみを詠み込んだ「辺塞詩」に分類されている。わが国では「防人歌」に相当するものである。特に起句「葡萄の美酒 夜光の杯」はエキゾチックな風物を描き出しながら当時のシルクロードの雰囲気を含に伝える。異国情緒溢れる起句に比して、結句の「古来征戦幾人か回る」は、戦前までしばしば日常生活でも引かれるほど、人口に膾炙したフレーズでもあった。これだけ多くの教科書に採録されるものの、当該詩の実践指導報告がさほど見受けられないのは、やはり戦争や軍事を取り扱ったためであると考えられる。そこで受容史のモデルケースとして通史的に治乱双方の側面を備えた江戸時代の用例を中心に取りあげた。江戸中期に刊行された服部南郭校訂『唐詩選』の果たした役割は大きく、現代に至るまでこの書物を通して人々が漢詩を身近に感じていたことはよく知られている。本稿はわが国における当該詩の受容状況について考察するものである。

### 二 王翰「涼州詞」について

明代の李攀竜の撰とされる『唐詩選』巻七には「涼州詞」と題される七言絶句が三点収録され、それぞれ起句には王翰「葡萄美酒 夜光杯（葡萄の美酒 夜光の杯）」、王之涣「黄河遠上 白雲間（黄河遠く上る 白雲の間）」、張籍「鳳林関裏 水東流（鳳林関裏 水 東に流る）」とある。この中で漢文教材の「涼州詞」と言えば、一般的に王翰のものがイメージされる。王之涣のものは「涼州詞」のほかに「登鶴鵲樓（鶴鵲樓に登る）」が漢文教材として採録される。当該詩「涼州詞」について平仄を付して『漢詩規則』とともに下記に掲げる。

涼州詞

王翰

○ ○ ● ● ● ○

起 葡萄美酒夜光杯

葡萄の美酒 夜光の杯

● ● ○ ○ ● ● ○

承 欲飲琵琶馬上催

飲まんと欲すれば 琵琶馬上に催す

● ● ○ ○ ● ● ●

轉 醉臥沙場君莫笑

酔うて沙場に臥すとも 君笑ふこと莫かれ

○ ○ ● ● ○ ○ ●

結 古來征戰幾人回

古來征戰 幾人か回かる

○ ○ ● ● ○ ○ ●

「押韻」杯・催・回・（\*來）（上平声十灰）

《漢詩規則（七言絶句の場合）》

① 二四不同・二六対（各句の二字目の平仄は四字目と逆、六字目は同じであること）

② 反法・粘法（各句の二・四字・六字目における「平仄」は、起句と承句とは逆（||「反法」）に、承句と転句とは同じ（||「粘法」）、転句と結句では逆（||「反法」となること）

③ 下三連の禁（各句の五・七字目は平と仄が混合であり、どちらかに偏らないこと）

④ 孤平の禁（各句の四字目は単独で「平」であってはならず、三字目か五字目と複合の「平」（○○）とすること）

⑤ 押韻（各句の末字において同じ韻目を用いること。例えば、同じ「アイ」と読む字であっても「哀（○灰）」と「愛（●隊）」では平仄・韻目ともに異なる。また、転句は必ず押韻しない）

当該詩において上記の規則は全て守られているが、結句の二字目「來」の韻目も「上平声十灰（○）」に属し、各句の末字以外でも押韻していることから、「冒韻」である点などが特徴である。内容は辺境の異民族に対する

防人歌「辺塞詩」であるが、これが作者の実体験に即しているか否かに論点が当てられている。「新唐書」列伝第二百二十七文藝中には作者王翰について次のような記載が見られる。

王翰、字ハ子羽。并州晋陽ノ人。少クシテ豪健恃ミレオヲ、及ブニ進士ノ第一。然ルニ喜ブニ葡萄酒ヲ。張嘉貞為リニ本州長史ト一、偉トシニ其ノ人ヲ一、厚コ遇ス之ヲ一。翰自ラ歌フコト以テ舞ヲ属シニ嘉貞ニ一、神氣軒拳自如タリ。張説至リ、礼益加フ。復タ挙ゲ直言ヲ一極諫シ、調シニ昌樂尉ニ一又挙ゲテ超コ拔ス君類ニ一。方ニ説輔レ政ヲ、故ニ召シテ為シニ秘書正字ト一、擢セラルニ通事舍人、駕部員外郎ニ一。……家ニ畜ヘニ声伎ヲ一、目使ムニ頤令セ一。自ラ視ルニニ王侯ヲ一、人莫シレ不ルハレ惡マレ之ヲ。説罷シニ宰相ヲ一、輸出デテ為リニ汝州長史ト一、徙ニ仙州別駕ニ一。日ニ与ニ才士豪俠一飲樂游ヒレ敗ニ、伐チレ鼓ヲ窮ムレ歛ヲ。坐シテ貶セラレテニ道州司馬ニ一卒。

ここに描かれる王翰の人物像は才気走つていて傲岸不遜な態度が見られ、そのために時の権力者に重宝されることもあるが、この性格が災いして左遷されることもあつたとの記載がある。陳舜臣の小説の中でもその生き生きとした様子が描かれている(1)。

王翰は進士として并州長史の張嘉貞に仕え、後任の張説にも仕えた。当時、各州の長官は「刺史」、副長官は「別駕」・「長史」・「司馬」などと呼ばれた。官職の名称はそれぞれ異なるものの、職務内容は同じであり、刺史の代理であつた。小川環樹によれば、唐の中期以降、副官は職務を遂行しなくなり、名目上の役職となり貶官のポストと目された(2)。張説は則天武后の近臣張易之に逆らつて欽州に流された。その後、中宗の即位に伴い、中央に呼び戻されたが、太平公主により左遷されるが、太平公主一派の失脚に伴い、またしても長安に呼び戻され、中書令に任ぜられた。その後、王翰と出会うこととなる。

当該詩「涼州詞」の成立背景をめぐつては青木正児・佐藤房儀・佐藤保などは当時流行した辺塞詩に倣つて想像で創作されたものと見ている(3)。これに対して、横山永三は「葡萄酒」・「夜光杯」・「琵琶」の三点に着目し、王翰は進士に及第する二十四歳以前(おそらく開元二年(七一四)以前)に涼州を訪ねているとの見方を示しながら、決して想像で詠まれた詩ではないと論じた(4)。異国の文物がちりばめられた当該詩であるが、松浦友久『校注唐詩解釈辞典』において水谷誠は諸注を整理している(5)。これを踏まえつつ、以下に当該詩における詩語の要点をまとめたい。

### A 「葡萄酒」(起句)

葡萄酒は、『史記』第二百二十三卷大宛列伝第六十三「宛ノ左右以テニ蒲陶ヲ一為ル酒ヲ。富人蔵シテ酒ヲ至ルニ万余石ニ一。久シキ者ハ数歳不レ敗セ」、張華『博物志』卷五「西域ニ有リテニ葡萄酒一、積年不レ敗セ」、『旧唐書』卷百九十八「王都ノ高昌。其レ交ハハリニ河城ニ一、前王ノ庭也。田地城ハ校尉ノ城也。勝兵且ツ万人。厥ノ土良沃ニシテ穀麦歳ニ再レ熟ス。有リニ葡萄酒ニ一」などの史書類に記載がある。この高昌国とは現在の新疆ウイグル自治区トルファン市に存在したオアシス都市国家である。ちなみにわが国における国産ワインは明治三年(一八七〇)頃に山梨県甲府市の植物学者町山田宥教と詫間憲久の兩人により葡萄酒の醸造が開始され、明治十年(一八七七)には日本人として初めてワイン醸造法習得のため、土屋龍憲と高野正誠の二人がフランスに留学した(6)。その後、明治四十年(一九〇七)八月に寿屋(現サントリー)社長鳥井信治郎は「赤玉ボードワイン」を新聞広告つきで販売を開始する。また、植物学者牧野富太郎は「支那の初唐時代での有名な詩の「葡萄酒ノ美酒夜光ノ杯、飲マント欲シテ琵琶馬上ニ催ス、酔テ沙場ニ臥ス君笑フコト莫カレ、古来征戦幾人カ回ヘル」はよく人口に膾炙した七絶である。我邦で昔葡萄酒をエビと云った」と述べている(7)。わが国において近代以前の人々には飲みつけない「葡萄酒」の味を想像しながら当該詩を愛唱していた状況が浮かびあがる。

### B 「夜光杯」(起句)

\* 「西域地方名産の白玉杯」であるか「西域伝来のガラスの杯」であるか。

青木正児は東方朔『海内十洲記』を踏まえ、周の穆王時、西方の胡地より「夜光常滿杯」が献上されるが、これが「白玉製」であり、その光明は夜を照らした記事に触れる一方で、西洋の学者からは「ガラス(玻璃)製」ではないかとする指摘を踏まえつつ、「葡萄酒」と「玻璃」の取り合わせについては宋代の樂史『楊太真外伝』の一節を取りあげている(8)。

### C 「琵琶」(承句)

琵琶の淵源について岸边成雄は西方のガンダーラ文化によるものであり、高昌によって伝えられたと述べる(9)。西晋時代の「竹林の七賢」の一人として有名な阮咸が演奏した四絃の琵琶は「秦琵琶」と呼ばれ、正倉院に奉納されている。

### D 「沙場」(転句)

\* 「砂漠」なのか「戦場」なのか。

日本人の漢詩解釈を批判した台湾の研究者張明澄は「沙場」は「砂漠」ではなく、「戦場」の意であると述べ、「臥」も「酔いつぶれる」の意ではなく、「死」を意味していると解し、「酔臥沙場君莫笑」というのは、「酔って戦場で死ぬ俺を笑ってくれるな」・「いざ出発の前に、酒で戦場へ死に行く恐怖をまぎらす俺を、君よ笑ってくれるな」という意味とする<sup>(10)</sup>。これに対し、松浦友久は「沙場」が「戦場」のイメージが重なっていることは認めつつも、「飲酒の場から戦場に行く」と解するのではなく、飲酒の場そのものが戦場であると結論づけている<sup>(11)</sup>。

### E 「君」(転句)

\* 軍中の同僚であるか、広く世間の人であるか。

このように当該詩においては諸説紛々としている状況があり、読み手に与える影響力の大きさを物語っている。元代の辛文房は『唐才子伝』巻一において「翰工ニシテ詩ニ多シ壯麗之詞」と述べ、明代の古文辞学派に属する王世貞は『藝苑卮言』巻四において「葡萄ノ美酒ノ一絶、便チ是レ無瑕之璧ナリ。盛唐ノ地位不ル凡ナラ乃爾」などと評しており、数ある唐詩の中でも作者・作品ともに後世高く評価された状況をうかがい知ることができる。

### 三 江戸時代の唐詩註釈書における「涼州詞」解釈

王世貞が嘆じたように当該詩は古来より高い評価を得てきたが、特に結句「古来征战幾人回」は人口に膾炙してきたことは間違いない。当該詩が人口に膾炙されたのは『唐詩選』によるところが大きい。明代の古文辞学派は李白・杜甫を中心とする盛唐詩を重視した。これを受けて江戸中期の古文辞学派荻生徂徠は「格調説」を唱えながら唐詩を強調した。その弟子服部南郭は『唐詩選』を校訂施訓し、享保九年(一七二四)正月に書肆嵩山房須原屋新兵衛のもとから発刊する。当該書は大評判となり、校訂者南郭の名を大いに高めた。南郭は『唐詩選』巻七において「涼州詞」に次のような和訓を施している。

葡萄ノ美酒夜光ノ杯

欲シテ飲ント琵琶馬上ニ催ス

醉テ臥スニ沙場ニ君莫レ笑フ

古來征戰幾ハク人カ回ル

これ以降の諸書には起句はどのように読まれているのだろうか。諸書を確認したい。南郭校訂『唐詩選』以前に刊行されたものでは、京都の書林田原勘兵衛版『唐詩訓解』がある。これには明代の李攀竜撰・袁宏道校と記載され、万曆四十八年（一六一八）刊居仁堂版に訓点を施したものである。日野龍夫によれば、『唐詩訓解』が大本八冊本でことごとく注を付けたものに対して、『唐詩選』は注を削って二冊ないし一冊本にまとめた点に違いがあり、収録詩は九割五分まで重複すると述べている(12)。『唐詩訓解』以降、当該詩はどのように解釈されてきたのか以下に確認したい。

### ① 田原勘兵衛版『唐詩訓解』卷七（寛文年間（一六六一〜一六七三））

葡萄ノ美酒夜光ノ杯 欲レ飲ント琵琶馬上ニ催ス 醉テ臥レ沙場ニ君莫レ笑コト 古來征戰幾人カ回ル 此レ為レ成客蒙飲ノ之

詞言ノ注ニ美酒ヲ于玉杯ノ之中ニ既ニ將ニ飲ント矣而適ク有琵琶侑ル 觴ヲ可シ不レ称快セ乎。于レ是ニ語ニ其ノ同儕ノ者ニ曰君無レ笑「我カ之狂ヲ観ルニ古來ヲ戰士生テ選者幾ク人ソ而可シ不レ飲マ耶。

省略した箇所には「葡萄美酒」が大宛国、西涼州（甘肅）の名産であること、「夜光杯」が東方朔『海内十洲記』を典拠とし、張正見の詩「酒泛夜光杯（酒は泛ぶ夜光の杯）」などの用例を掲げている。さらに、「琵琶」については「胡中馬上の楽」と注して「胡国（匈奴）」の音楽であると述べつつ、前に手を押し出すことを「琵琶」、後に手を退けて引くことを「琶」とする語源にも触れる。当該詩はたまたま琵琶と玉杯とを勧められた際に詠み、転句は「同儕（同僚）」に向かつて自身の狂態を笑わないように戒めたと解した。

### ② 入江南溟『唐詩句解』「七言絶句」（享保二十年（一七三五））

葡萄ノ美酒夜光ノ盃 二美備ル 欲スレハレ飲 飲ス 飲宴セント 琵琶馬上ニ催ス 有リ彈ジテ琵琶ヲ侑ル酒ヲ人ニ而益ク催ス飲ツ  
醉テ臥スニ沙場ニ君 指ス彈スル琵琶ヲ人ヲ。訓解ニ曰ク指ト同儕ヲ不レ可レ従フ 莫レレ笑フ「笑トハ者笑也。嗤ナリ、 古來征戰  
幾人カ回ル 言ハ古來戰士生テ而飯ル者幾ク人ソ乎。所謂戦城南北死スル者ノ必セリ矣。然ラハ則今日身尚ヲ在リ。豈ニ可ヤ不レ衰飲セ  
乎。

「葡萄酒」と「夜光杯」との「二美」が完備していると評しながら、①『唐詩訓解』の註釈をほぼ踏襲している。ただし、転句「君莫笑」の「君」とは「琵琶を弾ずる人」を指したものと解し、①『唐詩訓解』にある「同儕（同僚）」ではないと明確な否定を加えている。

③ 嵩山房『唐詩選四声並假名附』（宝暦八年（一七五八））

葡萄酒ノ美酒ノ夜光杯  
 欲飲琵琶馬上催  
 醉臥沙場君莫笑  
 古来征战几人回

四声（平仄）付き漢字の四方にある「▲」はそれぞれ平上去入の「四声」を示す記号であり、左上（平声）・左下（上声）・右上（去声）・右下（入声）を指している。

④ 宇野明霞『唐詩集註』卷七（安永三年（一七七四））

葡萄酒美酒夜光杯 欲飲琵琶馬上催 醉臥沙場君莫笑 古来征战几人回  
 悲不可堪。

右書でも『史記』『大苑伝』・『魏文帝書』・『唐書』・『海内十洲記』・『釈名』などの書籍及び「張正見詩」・「願野王詩」などの詩を参照する。当該詩は防人の心情が吐露され、口にこそ出していないが、その悲しみは堪えられないものであったと解す。

⑤ 顕常大典『唐詩解頤』卷七（安永五年（一七七六））

葡萄酒美酒 西域釀シテ葡萄酒ニ為レ酒ト 後其ノ法入ニ中国ニ 夜光ノ珠ノ名杯 欲飲シテ琵琶 本胡中馬ノ樂器 馬上ニ催ス 以侑ム酒興ヲ 醉臥沙場ニ君莫笑 古来征战幾人カ回ル 戦士多ク是死シテ不レ回故ニ自甘ス 暫時之生ヲ 悲不可堪 不 耐飲シテ自遣ラ 耶。 語極テ壮ニシテ而意極テ悲。

ここでもまた「葡萄酒」は西域の酒であり、後世中国に入ったものとし、「夜光杯」とは珠玉の杯であり、「琵琶」は匈奴の樂器として酒興として演奏したものとする。帰郷できないゆえに酒を飲んで暫時の生を樂しむのみで、その悲しみは言い尽くせないと解している。

⑥ 宇野東山『唐詩選解』卷下（天明三年（一七八三））

葡萄ノ美酒夜光ノ杯 欲シテ飲ント琵琶馬上ニ催ス 葡萄ノ美酒ハ、涼州テ出来ル酒。琵琶ヲ馬上ニ弾スルモ、涼州アタリテスル  
トユヘ、其処ニアルヲ云テ、此ノ処ヘ番手ニイテ、気象ナクヲ作ル。○葡萄デカモシタ酒ヲ、夜光ノ盃ニ引ウケテ、飲ムト思テ、肴ニハ  
馬上テ、琵琶ナドヲ弾ジ、ズイブンノムヲヂヤ。 酔テ臥スニ沙場ニ君莫レ笑フ 古来征戦幾ハク人カ回ル シタガコノヤウニ、  
酒ヲ飲ノンデ酔ヒタラレテイルヲ、定メテ人ガ笑フテアラフガ、ソレモカマハヌ。古カラコノ処ヘ、征伐ニ来テ無事テ帰タモノハスクナイ。  
大方討死シタリ、病死シタリスル。吾モアスノ命モシレヌユヘ、酒デモノンテタノシムガヨイト、酒ニメダヤウニ云ヒナシ、所詮此ノ身  
ハステ切タト云情ガアル。モウ是非ガナイト云意ヂヤ。

右は和文脈による口語文体の注釈書である。涼州産の「葡萄美酒」を「夜光杯」で飲みながら、酒肴として馬上で「琵琶」を弾ずるのも胡国当地の風習であったと解している。また、転句「君莫笑」の「君」は世間一般人を指すものとする。

⑦ 戸崎允明『箋註唐詩選』卷七（天明四年（一七八四））

蒲萄ノ美酒 名酒。西域所産。○本草曰、李時珍曰、有二様 釀成者味佳。有下如 燒酒法 者上。有大毒 酸取 汁同麴。如下常釀 糯  
米飯 法上。無 汁。用 乾蒲萄末 亦可。燒者、取 蒲萄 數十斤。同 大麴 酸酢、取入 甌 蒸之。以 器承 其滴露。紅色可愛。古者西域  
作之。唐時被高昌始得 其法。西域伝曰、大宛左右、以 蒲萄 為酒。富人藏 酒至 万余石。久者至 數十歳。 夜光ノ杯 名器。  
西域所出。○十洲記曰、周穆王時、獻 夜光 常滿杯。杯容 三升。是白玉之精、光明照徹。夜以杯於 庭中、以向 天。比 旦而水升滿  
中。汁甘而香美。実靈器。 欲シテ飲ント 承上而言。 琵琶 西域本有 此樂器。○釈名曰、琵琶本胡中馬上所 鼓。推 手前曰 琵琶、  
引 手却曰 琵琶。因以為 名。 馬上ニ催ス 征人適得 閑以 名器 酌 名酒。且 作 樂以 盡 歡樂。 酔テ臥スニ沙場ニ 龍砂 君  
汎指 世人 莫レレ笑コト 我久為 征人。今日 酣醉臥 沙場。此非 無心也。君必 莫 排笑 焉。 古来征戦幾人カ回ル 何則古来  
征成不 已。行役之人数百万。能生 婦幾人。我生涯 又可 知矣。寧不 尽 歡乎。

右書には「葡萄酒」の製法について李時珍『本草綱目』を参照しつつ、詳細な記述が見られる。「夜光杯」については東方朔『海内十洲記』、「琵琶」については劉熙『釈名』を引いて論じている。また、転句「君莫笑」の「君」は世間一般人の人であると解している。

⑧ 橋田忠厚『唐詩選講義』卷七（天明七年（一七八七））

葡萄ノ美酒夜光ノ杯 欲<sup>スレバ</sup>飲<sup>ント</sup>琵琶馬上ニ催<sup>ス</sup>

此ノ篇諸注家解シ得ズ。妄解杜撰ノミ也。愚嘗テ唐詩選質疑ニ論ズルヲ詳ナ

リ。葡萄美酒ハ涼州ノ名産也。葡萄ヲ釀<sup>カモ</sup>シテ酒ヲ作ル。其ノ甘キヲ麴藥ヨリモ甚シ。是レ美酒ノ最上ナル者也。夜光ノ杯ハ杯ノ最上ニテ葡萄

玉杯ヲ用ルハ酒宴ノ天極ナル者也。然レバ殺核ノ佳味筵席ノ華麗等ハ言<sup>ゴト</sup>ヲ待タズシテ知ル可キ也。…其ノ後王昭君ヲ單于ニ賜ヒ元帝ノ時

キ後宮良家ノ子ヲ匈奴ニ配スルノ類実ニ中邦ノ大恥辱ニシテ心外ノ挙動也。烏孫ヲ昆弥ニ嫁スルノ時<sup>キ</sup>旅中ノ思<sup>ヒ</sup>ヲ慰メント衷<sup>ヒ</sup>線ノ聲<sup>ヲ</sup>胡国ノ

樂器琵琶ヲ彈ジテ供奉セリ。王昭君ヲ嫁スル時<sup>キ</sup>亦同シ。然レバ琵琶ヲ馬上ニ彈スルハ秦<sup>モト</sup>中邦ノ好ム所ニ非ズ。恥辱ト為<sup>ル</sup>所ナリ。夜光杯

ヲ舉<sup>アゲ</sup>テ葡萄酒ヲ飲<sup>ント</sup>欲スルガ故ニ烏孫昭君ヲ嫁スル等ノ恥辱アリ。是ヲ欲<sup>レ</sup>ハ飲<sup>ント</sup>琵琶馬上ニ催<sup>スト</sup>云フ也。注家皆ナ葡萄酒ヲ夜光杯ニ盛テ

飲ムノ快キヲ言フトス、大ニ失セリ。… 醉<sup>テ</sup>臥<sup>ニ</sup>沙場ニ君莫<sup>レ</sup>笑<sup>フ</sup> 古來征戰幾<sup>ク</sup>人回<sup>ル</sup> 此ノ醉臥沙場ハ玉杯葡萄

ニ酔フ<sup>ヲ</sup>言フニ非ズ。玉杯葡萄ハ貴人ノ宴也。貴人ハ酔フト雖ドモ豈沙場ニ臥スノ挙動アランヤ。此ノ句ノ醉臥ハ常人ヲ以テ言フ也。借令

玉杯葡萄ニ非ズ、金殿玉堂ニ非ズト雖ドモ醉臥ノ興ヲ娛ムニ至テハ貴人モ賤人モ更ニ異ルコト無シ。然レバ沙場ニ臥<sup>シ</sup>タリトモ君必ズ笑フ

「莫<sup>レ</sup>。古來ヨリ征戰ニ出タル人生テ回<sup>カエ</sup>リタルハ<sup>ホトシ</sup>稀也。多クハ外國ニ亡命シテ泉下ノ鬼ト成レリ。然レバ玉杯美酒ヲ飲テ琵琶ヲ馬上

ニ催スルノ禍ヲ願ハンヤト暗ニ風規ノ意ヲ含メリ。…

ここでは「琵琶」を弾ずることについて王昭君の故事が持ち出されている。王昭君と言えば、前漢末期の元帝に仕えた後宮の侍女であり、絶世の美女として知られた。画師に賄賂を送らなかつたために容貌を醜く描かれ、この肖像画を目にした元帝により匈奴の単于への降嫁者として選出されるという悲劇が人々の涙を誘う。ここで特に注意したい点は馬上で琵琶を演奏することは快樂であつたとする諸注は誤りであり、胡国の風習に従つたこととは彼らにとつて恥辱であると見ている点である。「玉杯」や「葡萄」とあるからには貴人の酒宴に違いないが、彼らは沙場で臥すことがあるはずはなく、「醉臥」は常人の姿態を指しており、「玉杯美酒を飲テ琵琶馬上に催するの禍」には風規の意味が込められていと解している。

⑨ 橘石峯『唐詩選画本』卷一「七言絶句」(天明八年(一七八八))

葡萄美酒夜光杯 欲<sup>レ</sup>飲<sup>レ</sup>琵琶馬上催<sup>ハ</sup>

醉<sup>レ</sup>臥<sup>ニ</sup>沙場ニ君莫<sup>レ</sup>笑<sup>フ</sup> 古來征戰幾<sup>ク</sup>人回<sup>ル</sup>

てひわなどをたんし(＊「肴には馬上で琵琶等を弾じ」)てすひぶん(＊「随分」)のむ事じヤ。したか、このやうにさけにゑひたをれてい

るを、さためてひとかわらふてあるふが、それもかまわぬ。むかしからこのところへきてぶして（\*「無事で」）かゝつたものハすくない。大かたうちしにしたり、ひやうししたりする。われもあすのいのちもしらぬゆへさけてものんてたのしむかよい。

右書もまた口語文体による解説であり、従来の通説を踏まえた内容となつてゐる。

⑩ 千葉芸閣『唐詩選講釈』卷七（寛政二年（一七九〇））

葡萄酒ノ美酒夜光ノ杯 戊辰シテ、涼州ニ滞留シテ、居レハ、其土地ヨリ出ル、葡萄酒ノ味ニスル名酒ヲ、胡ノ宝ノ物夜光杯ニ

引請ノマントシタガ、何ニモ肴ガナイ。欲シテ飲シテ琵琶馬上ニ催ス ソコデ胡人ノ弾スル、琵琶ヲ一曲馬上ニテ催シコレヲ、肴ニ

シテ香マスナリ。酔テ臥スニ沙場ニ一君莫レレ笑フ酒ニ酔テ沙場ニ臥シ、居ルヲ、君トハ人々ト云フ、征戌ニキテ、ジダラクナ酔倒

レテ、アノアリサマハト、笑フコトナカレ。古来征戦幾ク人カ回ル 古来ヨリ征戦ニキテ、討死シタリ。病死ヲシタリ。幾ホドノ人

ガ、息災デカヘリシソヤ。スレバ酒ニ酔タ内ナリト、ウキナンギヲ忘レテ、暫ノ間ナリトモ楽マネバナラヌ。此方ナドモ安穩デ、飯ルモ

ナラヌト、覚悟シテヲリマスルトナリ。

こちらは胡国の夜光杯で飲もうとしたが、酒肴がないため琵琶に興じて酒を飲むものとする。こちらもまた転句「君莫笑」の「君」は世間一般の人であると解している。

⑪ 小林高英『唐詩選和訓』「七言絶句」（寛政二年（一七九〇））

葡萄酒 涼州の銘酒也。美とハ、よきといふことなり。夜光杯 玉の杯也。是も又涼州の方の西胡より制出す杯也。

欲レ飲 琵琶馬上 催 銘酒を珠の杯で一盃いたそふとおもふ処で、琵琶の音がかする也。琵琶ハ胡が多く馬上にて弾する楽器な

るニよつて、琵琶の音がすれば、馬上に催すと云たものじや。弾する体を見て言に非ず。酔臥ニ沙場一君莫レレ笑 琵琶の音を聞

なから、美酒を玉の杯で呑ゆへある。こふのんでハ酔テ沙の上でハ厭わず。倒れ臥すであろうか、誰も笑てきたさるな。君とハ、琵琶を弾する人

に非ず。広く誰でも見る人を言なり。古来征戦幾 人回 古来から辺国へ軍に來人が幾程回りました。大方回ハせぬ。皆死で果

ふ也。然バ酒でも酌で楽しみ、愁を忘れねバならぬと言ふこと也。

承句の「琵琶」については音色を耳にするのみで直接見ているものではなく、必ずしも実景を詠んだものではないとし、転句「君莫笑」の「君」は世間一般の人であると解している。

⑫ 皆川淇園『唐詩通解』卷七（寛政五年（一七九三））

葡萄酒ノ美酒夜光ノ杯 欲シテ飲シテ琵琶馬上ニ催ス 酔臥ストモニ沙場ニ一君莫カレレ笑フ 古来征戦幾人カ回 ○有葡

葡之美酒、盛<sup>ル</sup>ニ以<sup>テ</sup>夜光之杯<sup>ヲ</sup>者<sup>ト</sup>、而欲<sup>シ</sup>飲<sup>ム</sup>未<sup>レ</sup>飲<sup>ル</sup>之間、且<sup>レ</sup>援<sup>テ</sup>琵琶<sup>ヲ</sup>抱<sup>キ</sup>在<sup>ニ</sup>馬上<sup>ニ</sup>而撥<sup>シ</sup>聲<sup>ヲ</sup>始<sup>メ</sup>動<sup>ス</sup>。曲調<sup>欲<sup>シ</sup>ト</sup>催<sup>ス</sup>、夫樂<sup>飲<sup>ル</sup>如<sup>シ</sup></sup>是<sup>レ</sup>、吾其必醉<sup>ン</sup>、雖<sup>ニ</sup>乃醉<sup>以</sup>臥<sup>スト</sup>沙場<sup>ニ</sup>而君<sup>宜<sup>レ</sup></sup>莫<sup>ル</sup>嗤<sup>シ</sup>笑<sup>ス</sup>。試<sup>シ</sup>思<sup>フ</sup>古<sup>來</sup>從<sup>ニ</sup>征<sup>戰</sup>之<sup>士</sup>、能<sup>有<sup>シ</sup></sup>幾<sup>人</sup>全<sup>シテ</sup>其<sup>生<sup>ヲ</sup></sup>而回<sup>ル</sup>郷<sup>ニ</sup>者<sup>ト</sup>哉<sup>。</sup>

「葡萄酒美酒」を「夜光杯」に注ぎ込み、まだ口をつけないうちに琵琶を弾き抱えて馬上にある姿を詠み込んだものと解した。音色がはじめてから曲調を整える点に特徴がある。

上記諸書においては若干ながら解釈の異同状況がうかがえる。多くの註釈書が①『唐詩訓解』に倣って「葡萄酒」・「夜光杯」・「琵琶」について典拠を踏まえた内容となっている。内容は戦地における暫時の生を樂しむために、酒を飲んで狂態を晒しているとの解釈は共通するが、転句「君莫笑」の「君」については①『唐詩訓解』が「同席の者」を指すとしたのに対し、他書では「世間一般の人物」を指すと変容していることに特徴が見られる。また、⑧『唐詩選講義』は「王昭君」の伝説を引き合いにして、酔って「琵琶」を弾く胡国の風習を恥辱とし、「葡萄酒の美酒」を「夜光の杯」で飲む人物（貴人）と「酔うて沙場に臥す」人物（常人）とを別人と解している。貴人が沙場に臥すような無作法はしないといった見方については注目できる。江戸の人々にとつて当該詩における文物の要素については諸注の参照を要することとなるが、必ずしも先行文献にとらわれるものではなく、自由な鑑賞がなされてきた状況がうかがえよう。

ちなみに明治時代に愛読された森槐南『唐詩選評釈』巻七（明治二十九年（一八九六））には当該詩について次のような記載がある。

落筆極めて豪宕にして、命意極めて沈痛、其の大達觀を成すが如き即ち実に大悲觀の極たり。詩意を尋索すれば、設けて戌客豪飲の詞と為す。葡萄の美酒を以て、夜光の玉盃に盛る。既に將さに飲まんと欲して、適く馬上の琵琶の相催すあり。以て我が觴を侑めんと欲するものゝ如し。是に於て快極つて痛飲し、頽焉として沙場に醉臥す。其の態狂に似たるも、君且つ笑ふこと勿れ。抑く古來の征士、生還するもの幾人ぞ。既に生還せず。則はち今日の生唯く是れ暫時の生のみ、那んぞ大に飲んで以て今夕を永うせざるを得んや。素生に壯語を做す。自から其の悲を遣る所以、想ふて此に至る。其の沸沸たる酒氣、即はち是れ点点たる涙痕なり。

豪飲の中に見え隠れする大悲観、快極まって酔臥する状況をよく見ており、結末部の「其の沸沸たる酒氣、即ち是れ点点たる涙痕なり」といった一節は読み手にもよく伝わるところであろう。戦地における東の間の生を味わうという内容の当該詩は一貫してシリアスな内容であることは間違いないところである。それでは江戸時代における文学作品において当該詩はどのように受容されてきたのか、次節では別の観点からの考察を試みたい。

#### 四 文学作品における「涼州詞」の受容―近世から近代まで―

江戸中期の人々には当該詩は高く評価され、川合春川は『詩学選丹』巻上（安永六年（一七七七））において「葡萄ノ美酒夜光ノ杯 欲シテ飲ント琵琶馬上ニ催ス等ノ詩モ全篇相承テ珠ヲツヽルガ如シ。学者意ヲトヽムベキナリ」、思想家三浦梅園は『詩轍』巻一（天明元年（一七八一））において「唐人ノ雄渾豪壮ナル場ニ眼ヲ著テ、同感慨ニテモ、酔テ臥ニ沙場ニ君莫レ笑」古来征戦幾人カ回ニ撃節シテ」と述べ、ある種の感銘をもって受容されてきたことがわかる。特に畑中荷沢は『太冲詩規』（天明四年（一七八四））「起結論」において「結句ノ妙ナルモノ、王翰ガ古来征戦幾人回ト云」と結句に強い印象があると論じる。

十八世紀中期に書かれた著者未詳の『八水随筆』には荻生徂徠門下の高野蘭亭と服部南郭が登場する。当該詩をめぐり、当時の人々の武士と詩人の感性の違いが垣間見られる。

○松平越中守殿へ蘭亭まいり唐詩センをよみしに、王翰か涼州の詞の末の二句「酔臥沙場君莫笑、古来征戦幾人回」と云所を弁にまかせてよみけれハ、越中守殿「蘭亭暫くまつへし。詩人は左様の句を賞美して面白くといふへけれど、武門にハ取らざる所なり。『古来征戦幾人かかへる』と云こゝろをふくまハ、何の用に立士にあらず。予か家のワかきものともにハ、左様の句は覚へさせともなし」と仰られしかハ、蘭亭も何と云てよからんやとおもひても、さしあたるあいさつ出かたかりし故、「御尤」と云て帰りしと、南郭先生にはなして笑ひし。

高野蘭亭が松平越中守殿の邸宅で『唐詩選』講義の際に「涼州詞」に熱弁を振るったのに際して、越中守より「古来征戦幾人回」の箇所をめぐって「我々武門にとってこの一節は志気にかかわるから、家中では暗記させたくない」と気持ちを吐露した談話を記録している。江戸中期の人々にとって「涼州詞」がどのように受容された

か知るうえでの好材料となろう。ちなみにこの越中守について、白井喬二や成瀬閑次は当該大名を「伊勢桑名藩主松平定重」と解している<sup>(13)</sup>。当該人物がこの松平定重であれば、享保二年（一七一七）に没しており、ここで現れる『唐詩選』は南郭校訂本ではないことから、前述の①『唐詩訓解』を指しているのかもしれない。

宝暦十二年（一七六二）七月、琉球国から薩摩国に向けて出航した船が遭難して土佐国宿毛湾大島浦に漂着した。土佐藩儒戸部良熙は乗船していた琉球人潮平親雲上から琉球国の諸事情を聞き書きした。この中の「琉球歌」において「涼州詞」が引かれている。

伊祖の軍守夏過て冬やおざけもてよらて遊ひむしよち

これハ至て久しき曲のよし昔軍たひ／＼ありし頃伊祖と云所へ防戦のためゆきしそれをなくさめて歌しなり。おざけハ酒也。よらてハよひて也。遊ひんしよちハ遊事なさん也。酔臥<sup>トモ</sup>ニ沙場<sup>ニ</sup>君莫<sup>レ</sup>笑<sup>フコト</sup>（『大島筆記』）

琉球国での防人歌「伊祖の軍守夏過て冬やおざけもて：」に対して「涼州詞」の結句「古来征戦幾人回」と同じ趣向が見られるとの指摘がなされており、当該詩が一般に浸透していた状況がうかがえる。また、当該詩は江戸の戯作本の中にも用いられる。沢田東江の洒落本『異素六帖』巻下（宝暦七年（一七五七））には「酔つふれた客」の一コマに「酔臥<sup>ニ</sup>沙場<sup>ニ</sup>君莫<sup>レ</sup>笑<sup>フ</sup>」みたれそめにしワれならなくに」と転句が引かれており、大田南畝の狂詩集『狂詩諺解』（天明七年（一七八七））には「奥州詞」なる次の一詩が掲載される。

座頭茶菓茶碗盃

座頭の茶菓茶碗の盃

欲飲三線夢中催

飲まんと欲して三線夢中に催す

醉唱仙台君莫笑

酔ふて仙台を唱ふとも君笑ふこと莫かれ

古来音曲幾人哀

古来の音曲幾人か哀しむ

【形式】七言絶句／【押韻】盃・催・哀（上平声十灰）

その傍注には、紀上太郎ほか『碁太平記白石噺』第七段目「揚屋」に登場する場面が詠み込まれたものと記される。悪代官に百姓と茂作を殺された娘信夫は遊女となって江戸に登った姉宮城野のもとを訪れる。吉原の傾城と奥州の田舎娘との会話が焦点が置かれ、「奥州詞」とは両者の話す仙台言葉を踏まえたとあり、森田座の顔見

登場する仙台座頭の芸達者な様子やその音曲が昔の人を泣かせたものであることに言及されている。このようなパロディ要素を含んだ諧謔的な要素が見られたものの、その一方で幕末期には吉田松陰も当該詩「涼州詞」にまつわる長州藩の藩政改革に携わった村田清風の発言を記録している。

嘉永甲寅正月（\*嘉永七年・安政元年（一八五四））、相模国御備場藩御受取相成、最初ヨリ木原源右衛門御預所奉行タリ。彼地詰居中、粟屋帯刀・山県与一兵衛・北条瀬兵衛等浦賀ノ御出入ノ者ノ所ニテ酒ヲ飲ミ、三味線ヲ引セタトカ事寄セテ追下シニ仰付ラレタリ。蓋シ木原力議ニ出タルナラント、誰人モ申合ヘリ。故ノ村田松齋翁此事ヲ聞テ罵テ云ク、「唐詩選ヲスラ読ヌ奴ガ、ナトカ戌兵ノ情ヲ解センヤ、酔臥沙場君莫笑、古來征戰幾人回、トハ云ヌカト」、家兄曾テ此事ヲ以テ余ニ語ル。余乃チ治心氣先生ニ聞ク所ヲ以テ是ニ対フ。……然レハ木原モ亦唐詩選ヲ読ヌニハ非ズ、唯読ム所同シカラサルノミ。此二条他日詩話ナト作ルモノニ語り度思ヒ、忘レヌ内ニ録置ナリ。

（『吉日録』(14)）

相模国の沿岸警備に当たった木原源右衛門が朋輩と酒を飲んで妓女に三味線を弾かせていた話を耳にした長州藩の重臣村田清風はその墮落ぶりに激怒し、「『唐詩選』すら読んでいない者が戌兵の情に通ずるはずはない」と非難した際に、結句「古來征戰幾人回」の一節を引く。吉田松陰は山田宇右衛門（治心氣齋）にこの話題に触れたところ、治心氣齋が江戸に出仕していたとき、木原が杜甫詩を引用して、しばしば「令嚴夜寂寥でなくて行ぬぞ」（「後出塞五首其二」）と口にしたことを聞かされる。この話を受けた松陰は『唐詩選』を愛読しながらも村田清風と木原源右衛門の着眼点が異なっていると結論づけている。同年九月、萩に連れ戻されて野山獄に幽囚された松陰は『唐詩選』を熟読したことを述べ、相模国の警備に赴いた友人来原良蔵に向けて次のような言葉を送っている。

何<sup>ソナ</sup>乃<sup>ハ</sup>チ望<sup>ミ</sup>レ郷<sup>ヲ</sup>瀝<sup>ギ</sup>レ涙<sup>ヲ</sup>、傲<sup>ナ</sup>フコトニ婦女子<sup>ニ</sup>為<sup>ル</sup>サン。為<sup>リ</sup>レ成<sup>ト</sup>作<sup>ル</sup>コトレ詩<sup>ヲ</sup>如<sup>シ</sup>レ是<sup>カ</sup>クノ、固<sup>ト</sup>ヨリ不<sup>ル</sup>レ如<sup>シ</sup>カ<sup>ニ</sup>日<sup>フ</sup>ド「酔  
ヒテ臥<sup>ニ</sup>沙場<sup>ニ</sup>君莫<sup>カレ</sup>レ笑<sup>フ</sup>コト、古來征戰幾人<sup>カ</sup>回<sup>ル</sup>」、一擲千金<sup>ヲ</sup>渾<sup>テ</sup>是<sup>レ</sup>胆、家<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>ニ四壁<sup>一</sup>不<sup>ト</sup>上<sup>レ</sup>知<sup>ラ</sup>レ貧<sup>ヲ</sup>」之  
氣胆可<sup>キ</sup>ニ觀<sup>ル</sup>也。

（「与良三論詩書」(15)）

こちらの一文でも「古來征戰幾人回」の精神でことに当たってほしいと言及する。このように時代によつてこの箇所の解釈が異なっていることに気づかされる。

「涼州詞」の翻案詩としては、明治三十八年（一九〇五）秋に乃木希典大将が日露両国の講和条約の成立を聞いて凱旋帰国の日を思つてその心境をうたった「凱旋」が知られる。

皇師百万征強虜

皇師百万強虜を征し

野戦攻城屍作山

野戦攻城屍山を作す

愧我何顔看父老

愧づ我何の顔ありてか父老に看えん

凱歌今日幾人還

凱歌今日幾人か還る

【形式】七言絶句／【押韻】山・還（上平声十五刪）

皇軍の多くの兵士が戦場に送り出され、凄まじい戦闘により死体如山のようになる惨状となる状況を詠み込んでものである。今日は凱旋ということ人で沸き返っているが、あの将兵たちの一人一人の親たちに向かつて、どう言つて詫びたらよいのかと自責の念に追い詰められた作者の心境が切々と伝わってくる。おそらく漢楚の興亡において江東の子弟をむざむざ戦死させてその父兄に顔向けができなかつた項羽の心情も踏まえられていることだろう。

近代以降も当該詩はしばしば引かれており、横山源之助『明治富豪史』（明治四十三年（一九一〇））において南米に渡つて海外移民事業に尽力した事業家田中貞吉を取りあげ、彼が唐詩を諳んじており、特に「葡萄酒夜光杯 欲飲琵琶馬上催」のフレーズを好んでいたことが紹介されている。

何人なりやと熟視すれば、前の郵便電信学校校長田中貞吉であつた。元気ですなと、といへば、呵々と笑つて、酒はおでんに限る、といひながら闇中に没し去つた。そして絶へ／＼に酔臥ニ沙場ニ君莫レ笑 古来征戦幾人回」といふ詩吟の声が聞こえてゐた。

現代ではあまり耳にすることはなくなつたものの、戦前には江見水蔭『泣かぬ女』終編（大正二年（一九一三））、直木三十五『明暗三世相』（昭和八年（一九三三））、尾崎士郎『人生劇場』残侠篇（昭和十二年（一九三七））、梅崎光生『硝烟を芽ぐむ』（昭和十九年（一九四四））などには「古来征戦幾人か回る」の一節がしばしば文中に引用されており、戦前まではこの結句が愛唱されていた状況がうかがえる。無常を強く感じていた近代の人々は、当該詩の起句「葡萄酒夜光杯」が醸し出す「異国情緒」と結句「古来征戦幾人回」における「悲壮感」と

のギャップに魅了されていたのかもしれない。

## 五 まとめとして

王翰「涼州詞」の受容状況について諸書の用例を確認した。異国情緒溢れながらも戦場での悲哀を詠み込んだ当該詩における江戸時代の受容実態が垣間見えた。この中では江戸中期以降の『唐詩選』の普及により当該詩が江戸の人々の心を掴みながら、様々な解釈がなされた様子がうかがえる。また、江戸時代を通じて読み手の捉え方は一様ではなく、その立場によって当該詩の受容状況の違いが明らかであり、結句は戦前まで人口に膾炙された実態も浮かびあがった。冒頭で述べたように、定番教材であるにもかかわらず、軍事を背景にしたためか、教材としての意義について語られることは少ない。ただし、漢詩の一節が人々に口ずさまれた事例を知ることも古典を学ぶうえで大変意義深いことと感じられる。

最後に日本漢詩における戦争漢詩教材について考察したい。陸軍士官学校を卒業して終戦直前に任官した陸軍最後の現役将校であった清水浩（雅号「怡荘」）は喜寿を越えた頃、戦争の歴史に自作の漢詩を添えた書籍を自費出版の形で発表した。これら一つ一つの作品はかの戦争で亡くなった犠牲者に向けたささやかな鎮魂歌であると述べている。その中にある「出征兵士」と題された一首を下記に取りあげる。

干戈無戢歳華遷

干戈<sup>かんくわ</sup>戢<sup>む</sup>無<sup>く</sup>歳<sup>さい</sup>華<sup>くわ</sup>遷<sup>う</sup>る

離別声盈闔国天

離別<sup>りべつ</sup>の声<sup>こゑ</sup>は盈<sup>み</sup>つ闔<sup>かんとく</sup>国<sup>こく</sup>の天<sup>てん</sup>

人生誰喜自投死

人生<sup>じんせい</sup>誰<sup>たれ</sup>か喜<sup>こゝろ</sup>ばん自ら<sup>みづか</sup>死<sup>し</sup>に投<sup>な</sup>ずる<sup>を</sup>

悲淚敢征風雨前

悲淚<sup>ひなみ</sup>敢<sup>あ</sup>へて征<sup>せい</sup>す風<sup>かぜ</sup>雨<sup>あめ</sup>の前<sup>の</sup>前<sup>まへ</sup> (16)

【形式】七言絶句／【押韻】遷・天・前（下平声一先）

【詩意】何年も戦いはやまず離別の声は国中に満ちている。死を喜ぶ者などいるはずはないが、涙の中で出征に向かう。

軍人として現実に戦争に携わった人物の詠んだ漢詩であるため、その悲壮感が読み手にも直に伝わってくることになる。また、静永健も反戦漢詩教材として「車麟麟馬蕭蕭」で始まる杜甫の「兵車行」に倣った山形出身

の漢詩人士屋竹雨の「原爆行」・「水爆行」を紹介している(17)。これは言うまでもなく広島・長崎の原爆投下とビキニ環礁でおこなわれた水爆実験を詠んだものである。漢詩は必ずしも中国で創作されたものばかりではなく、わが国の文学作品にも強く結びついている。「涼州詞」の「葡萄美酒」の利那的な味わいに加えて、わが国では当該詩がどのように受容されてきたのか、さらに戦争文学の一つとして表現された漢詩を読み味わせることも新たな視点を与える意義の深いものになると考えられる。

【注】

- (1) 陳舜臣「葡萄の美酒 夜光の杯」(『中国畸人伝』 新潮社 一九九〇年十月初出 一九八七年十一月)
- (2) 小川環樹「唐の官制と官職」六五八頁。(『唐代の詩人』 大修館書店 一九七五年十一月)
- (3) 青木正児『中華飲酒詩選』一五五頁。(筑摩書房 一九六一年四月) 佐藤房儀「王翰「涼州詞」考―西域幻想」八頁。(『中京国文学』第二号 一九八三年三月)・佐藤保『中国古典詩聚花9行旅と辺塞』一一九頁。(小学館 一九八四年十一月)。
- (4) 横山永三「王翰・その詩《涼州詞》考」四五頁。(『九州産業大学教養学部紀要』第三〇巻第一号 一九九三年六月)
- (5) 水谷誠「涼州詞其一」(『校注唐詩解釈辞典』 大修館書店 一九八七年十一月)
- (6) 篠田統『中国食物史』(柴田書店 一九七四年六月)・上野晴朗『山梨のワイン発達史 勝沼・ワイン100年の歩み』(勝沼町 一九七七年十月)・山口瞳「青雲の志について」(『やってみなはれ みとくんはなはれ』新潮社 二〇〇三年九月)・廣居健「【葡萄酒】に見る中国酒の個性」(立命館大学人文学会『立命館文學』六〇八号 二〇〇八年十二月) 参照。
- (7) 牧野富太郎「ブドウ(葡萄)」九三〇―九四頁。(『植物記』 桜井書店 一九四三年八月)
- (8) 青木正児「夜光杯」一一一―一二頁。(『中華名物考』 春秋社 一九七一年六月)
- (9) 岸辺成雄「琵琶の淵源」(『唐代の楽器(東洋音楽選書2)』 音楽之友社 一九六八年一月)
- (10) 張明澄「名詩変じて兵隊やくざ礼賛詩となる」四〇頁。(『誤訳・愚訳 漢文の読めない漢学者たち!』 久

保書店 一九六七年十一月)

- (11) 松浦友久「〔付設〕「沙場」考」一八八頁。(『詩語の諸相―唐の諸相』 研文出版 一九八一年四月)
- (12) 日野龍夫「唐詩選の役割」二六二頁。(『日野龍夫著作集第一卷 江戸の儒学』 ペリかん社 二〇〇五年三月)
- (13) 白井喬二『国史挿話全集』四〇八頁。(春秋社 一九三四年四月)、成瀬閑次『随筆茶壺』一四頁。(増進堂 一九四六年五月)
- (14) 山口県教育会『吉田松陰全集』第七卷(岩波書店 一九三五年二月)
- (15) 山口県教育会『吉田松陰全集』第二卷(岩波書店 一九三四年十月)
- (16) 清水浩「第三章 列伝篇「草莽列伝」」二四九頁。(『大東亜戦争詩史』小野高速印刷 二〇〇三年十一月)
- (17) 静永健「高校生に薦めたい漢詩「原爆行」「水爆行」について」(『九州中国学会報』第四十八号 二〇一〇年五月)

(ひぐちあつし／狭山ヶ丘高等学校)